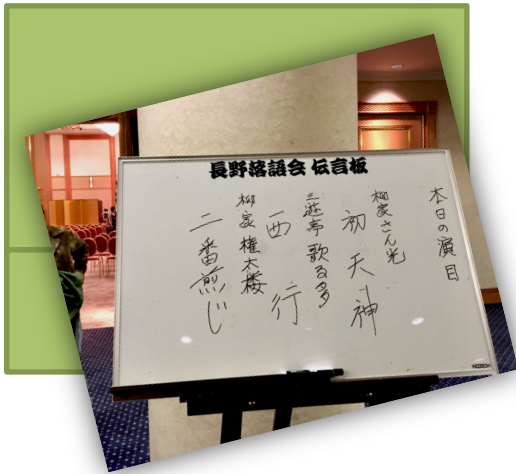


かんだた瓦版

第23号

令和元年12月



その、お酒を飲む仕草が、なんともおかしいのです。ホテルの宴会場に集まった、五百人近くの人たちから、一斉に笑い声がこぼれます。

火の用心の見回りをするために、集まった町内の人々。拍子木を叩きながら、一廻りをしますが、あまりに寒いこと、寒いこと。番小屋に戻ったところで、ご法度のお酒を

チビリと。誰が用意したのか、鍋まであります。そうして、温まって気持ちよくなったところに、いかめしい顔のお役人が来たので、さあ大騒ぎ、、、。

おなじみの古典落語の「二番煎じ」ですね。

語るのは、七十歳を超えたとは思えない迫力の、柳屋権太楼です。

落語の好きな人達が集まって始めた「長野落語会」は、もう40年近く、年に数回の会を開いています。最初の頃は、古い料亭の大広間でやっていたのですが、観客が入り切らなくなり、今では、ホテルで開いています。それでも、チケットは毎回完売、全く宣伝もしないのですけれどね。

私も、公演が、店の定休日に合えば、参加させていただいています。やはり、落語は、じかに聞くに限りますね。

会場の雰囲気を読み取りながら、話に引き込んでいく噺家さんの力は、さすがです。

私も、東京で過ごした若い頃に、よく、寄席に行きました。たいてい新宿にある末広亭というところで。

この建物は、その頃すでに、だいぶ古くなっていましたが、今でもそ

のまま続けておられるのですね。懐かしい場所です。

寄席とは、いろいろな方が出てきます。落語ばかりでなく、漫才も、声帯模写（今はモノマネといいますね）も、曲芸も紙切りもありました。たいてい一人15分ぐらいで変わっていき、最後にトリと言われる師匠が、少し長い落語を披露します。

出演する方々それぞれに、個性的な芸があって、楽しいものでした。

先代の正蔵は、ボソボソと話し出すので、よく聞こえない、と思っていると、いつの間にか客席が静まり返って、皆聞き入っているのですね。

先代の小さんは、食べ物を食べる仕草がうまい。一度そばを食べる仕草をしたときには、寄席中が沸きました。

それでも、そういう師匠と呼ばれる噺家になるには、とても大変なことのようです。話だけで、人を惹きつけると言うのは、並大抵のことではありません。

修行を始めたばかりの前座さんなどは、誰も噺を聞いてくれません。

上野に本牧亭という寄席がありましたが、ここは前座さんが話をしている間は閑散としていました。広い座敷の座布団を枕に、寝ている人も

います。後ろでは、おじさんたちが丸くなって、世間話をしています。

そんな中で、緊張した声で、落語を話すのだから大変です。

やがて、師匠たちが出る頃には、満席になるのですが。



落語会の途中に抽選会があって、一度だけ、手ぬぐいが当たったことがあります。

同じ話をしても、退屈に思う話し方もあれば、惹きつけられる話し方もある。

落語家さんは、そういうものを学んできたから、五百人もの人の気持ちを、一人で掴むことができるのですね。

ひょっとしたら、そば屋という商いにも通ずるところがあるのかもしれませんがね。

私も、もっと落語を聞いて、学ぶことにしましょう。